

平成18年度「専修学校教育重点支援プラン」成果報告書

事業名	ID手法を用いたリハビリテーションのeラーニング教材開発 および遠隔教育のプログラム開発		
法人名	学校法人福田学園		
学校名	大阪リハビリテーション専門学校		
代表者	理事長 福田 益和	担当者 連絡先	松崎英明 TEL 06-6352-6076
<p>1. 事業の概要</p> <p>リハビリテーション分野では、膨大な知識と技術を習得するために効果的かつ効率的に教育内容を習得できる教授法の工夫が求められている。また、昨今、eラーニングの活用が高まる中、単位取得が一部認可された。</p> <p>本事業では、eラーニングを活用して最適な教育ができるように、現在企業における研修で注目されているID手法を教育機関においても導入し、教材開発および教授手法を教育するプログラムを開発した。さらに、開発した教材を用いた遠隔地との双方向性ある教授を実施し、その教授手法および効果を検証した。</p> <p>ID手法(インストラクショナルデザイン: Instructional Design)とは、授業全体を分析・設計・開発・実施・評価を行い、教育の効果と効率と魅力を高めていく方法論である。eラーニングの導入時に教育効果を上げるために活用されるケースが増えている。企業での研修に導入されている。</p>			
<p>2. 事業の評価に関する項目</p> <p style="margin-left: 20px;">①目的・重点事項の達成状況</p> <p>ID手法の教育機関への導入及び教材開発・教授方法を教育するプログラム開発、さらに開発教材を用いた遠隔地との双方向性ある教授の実施及び検証につき、事業の趣旨・目的は達成できた。</p> <p style="margin-left: 20px;">②事業により得られた成果</p> <p>①ID手法を用いた分析・設計 教育内容をID手法のプロセスに準じて分析と設計を行った。このID手法に関するリハビリテーション分野における教育プログラムは、他の分野の教育手法にも応用できるものである。</p> <p>②ID手法に基づいたコンテンツ開発・教授 ID手法による分析・設計に基づき、eラーニングのコンテンツ開発を行い、開発したコンテンツを共同研究校双方で教授した。また、教授したコンテンツをもとに双方向性のある演習を行った。このコンテンツ作成は教員自らが作成したものであり、コンテンツ作成技法は、今後の教員によるコンテンツ作成を容易にするプログラムである。</p> <p>③ eラーニングコンテンツ・教授法および教育効果の評価 開発したコンテンツの評価を教員・学生から実施した。また、開発したコンテンツと双方向性のある教授によりフィードバックをブレンディングすることにより、教育効果を測定した。この評価結果は、今後のコンテンツ作成に参考になるものである。</p> <p style="margin-left: 20px;">③今後の活用</p> <p>①ID手法を用いた分析・設計 ID手法に関するリハビリテーション分野における教育プログラムは、他の分野の教育手法にも応用できるものであるため、研修会等で広く浸透するよう活動を続ける。</p> <p>②ID手法に基づいたコンテンツ開発・教授 コンテンツ作成技法は、今後の教員によるコンテンツ作成を容易にするプログラムであることから、同様に研修会等で教員に指導する。開発されたコンテンツは今後のカリキュラムに組み込み、さらなる検証をし、他の教育機関にも公表していく。</p>			

④次年度以降における課題・展開

具体的な教育経験が少なく、OJT中心であったリハビリテーション分野の養成校教員が、ID手法を理解することで、教育内容を「誰に」「何を」「どの程度」習得すべきかを分析し、達成目標を観察できる表現で指導できるようにレベルアップを図る。

また、開発したコンテンツなどの情報は継続して公開していくことで、ID手法を用いたeラーニングのモデル校として機能していきたい。

さらに、研究開発の結果は、学会での発表を予定している。

OJT(On the Job Training)とは、現場で、管理者や先輩が職務遂行を通して、①組織メンバーとして成長するための布石、②仕事に必要な知識や技能、取り組み姿勢、③仕事をするものの価値や達成感等々をどう効果的にかつ有効に身につけさせるか、意識的に取り組む育成・指導の活動をいう。

3. 事業の実施に関する項目

①教育体系開発技法の調査等

①インストラクショナルデザインの位置付けの整理

②わが国のISD技法の取り組み状況

③学校へのISD技法の適用及び学科・科目・指導項目の考察等を調査

→わが国の学校でもISDを導入した学校や興味を示している学校は珍しくはない程度には到達しているが、学校の数に比べると取り組み校は極めて少ない。高専、専修学校は少なく、大学が多い。

②カリキュラムの開発

①ID手法を用いた教育プログラム

教育内容をID手法のプロセスに準じて分析と設計を行う教育プログラムの開発

②ID手法に基づいたコンテンツ開発プログラム

コンテンツ作成は教員自らが作成するものとし、コンテンツ作成プログラムを構築

③eラーニングコンテンツ・教授法および教育効果の評価プログラム

開発したコンテンツの評価方法のプログラムを開発

③実証講座

【教員対象の研修】(PT・ST・OT各教員20名対象)

①リハビリテーション校に所属する教員を対象として教育学ならびに各種IDについての研修を行い、教育プログラムの内容の検証と普及を行った。

②開発したeラーニングのコンテンツを教員対象に実施し、検証を行った。

→IDについての教員の反応は驚くべきもので、自己の授業計画に導入すべきとの声が多かった。また、「コンテンツは業者が作成するもの」との考えを改め、自ら簡単に作成できることを認識した。

【学生対象の実証講座】(PT・ST・OT各学生20名、計60名対象)

①開発したコンテンツを用いて、学生対象にeラーニングで履修させ、コンテンツの評価を行った。

②開発したコンテンツをeラーニングで履修した後、CBTによるスキルチェックならびに演習と質疑応答をeラーニングで双方向性のある指導で行った。

→興味を持った学生が多数好意的に受け止めていた。自由な時間に自分の不得意な分野のみを効率的に学習できると評価は高かった。

④その他

このプロジェクトでは、リハビリテーション教育の現場において、IDを研究し教育内容の開発に応用するだけでなく、業者に委託するのではなく、実際に教員自らがeラーニングのコンテンツ開発を行なった。その結果、学生がどのように新しい教育方法に反応を示すのかを検証した。これまでに実施してきた医療教育のやり方と大きく異なっているために、学生からもさまざまな意見が発せられている。また、分析・開発の段階で、ID手法の概念習得から実際の応用まで実際に導入していくのにはかなり苦勞した。

本プロジェクトでは、専門学校2校に分かれて、それぞれ各教員が自ら検討を行ない、コンテンツを作成したことは、非常に有意義な結果が得られたと思われる。具体的な教育経験が少なく、OJT中心であったリハビリテーション分野の養成校教員が、ID手法を理解することで、教育内容を「誰に」「何を」「どの程度」習得すべきかを分析し、達成目標を観察できる表現で指導できるようにレベルアップを図ることができたと思われる。